

3.3 剪定・施肥等の工夫

植物が密植している場合は間伐、間引き等を行い、園地の通風・採光を良好にするとともに、樹幹内部の通風・採光をよくするために、剪定を行い、健全な植物の育成を図る。なお、間伐、剪定を行った際に、病害虫が発生部位が見られる場合は、園外に排出し適切な処理を行う。

また、健全な植物の生育を促進する観点から、有機質肥料の施肥や土壌改良材の投入等を行うことも有効である。

4 主要な病害虫等

4.1 総論

アンケート調査によると、各自治体において苦慮している病害虫・雑草の約9割は害虫である。このため、主要害虫について、その生態や防除法等について解説する。なお、害虫については、人への危害がある害虫についても、特に、重要と考え解説を加えている。

4.2 害虫

☆アメリカシロヒトリ

分 布 : 本州・四国・九州

発生時期等: 年2回(一部3回)の発生。樹幹の割れ目や樹皮下などで蛹化して越冬し、5～6月に成虫が発生し、葉裏に産卵。幼虫は5～7月と8～9月に出現。幼虫は中齢期まで葉を糸で覆って巣を作って集団で生活し、葉脈を残して葉肉を食べる。4令以降は分散して葉を食す。

寄生植物 : 極めて雑食性で、スズカケノキ、トウカエデ、サクラ、ミズキ、クワ等

人への害等: 無し

予察方法 : アメリカシロヒトリの防除は下記に示すように、若齢幼虫時の防除がもっとも効果的であるため、アメリカシロヒトリの発生時期の的確な把握が、重要となる。このため、フェロモントラップを活用して成虫の発生時期を把握し、そこから予想される幼虫発生時期に重点的な発生状況の見回りや防除を実施する。なお、トラップに捕殺数がピークになった2～3週間後が防除適期。

防除方法 : 発生時期に頻繁に樹木を見回り、発生初期の幼虫が群をなしているうちに枝ごと切り取り、踏みつぶす方法が最も効果的。この時期を過ぎると幼虫が樹木全体に広がってしまう。微生物農薬ではBT剤の適用があり、その他の農薬も登録がある。散布する際は発生樹木に限定して散布する等飛散防止に努める。また、幼虫そのものを殺虫する効果はないが、フェロモン剤(フォールウェブルア剤)による雄成虫の誘因・捕獲により、次世代のアメリカシロヒトリの幼虫被害を低減させる方法もあり、第一世代から継続し、複数年

捕獲し続けると大量発生がなくなったとの報告がある。

常発地帯では、毎年発生が予想される場合は、発生前に農薬を樹幹に打ち込むことにより農薬を樹体に浸透させる方法もある。この場合、作業時の飛散もなく環境への影響が少ないものと考えられる。



成虫：開張* 22 ～ 36mm

*開張：翅を開いた状態での端から端までの長さ

若齢幼虫：若齢幼虫は、はいた糸の上で生活し葉を食害する。



若齢幼虫



成熟幼虫：体長約 30mm



蛹：葉裏や枝に荒いマユを作って蛹化



被害の様子（左サクラ 右ブラタナス）：サクラ等では中肋を残して丸坊主となることがある。

☆チャドクガ

分 布：本州、四国、九州

発生時期等：年2回発生。卵で越冬。第1回の発生は、4月中旬頃孵化、若齢幼虫は糸を吐いて頭部をそろえて群生し、葉の裏面から葉肉のみを食害するが、老熟すると分散して葉縁から食害する。6月中旬から下旬に老熟し、根際などに降りて蛹化することが多い。繭は褐色で薄く、体毛を混ぜて作られる。第2回目の幼虫の発生は、8月下旬から10月中旬まで。

寄主植物：ツバキ、サザンカ、ヤブツバキ、チャなどのツバキ科の植物

人への害等：体毛は非常に脱落しやすくふれると激しいかゆみを覚え発疹するが、この毒毛は幼虫のみではなく、成虫、卵塊、繭にも付着している。

防除方法：家庭の庭等管理が容易な場所では、冬のうちにたんねんに葉裏の卵塊をさがして除去も可能。また、幼虫のまだ小さいうちに葉を切り取って踏みつぶしたり、ビニール袋で覆って、枝や葉を切り取って袋に入れるのも効果的な防除法。駆除は風のないときを選び、体毛が直接皮膚に触れないようにして行う。また、集団に対して農薬をスポット的に散布することも可能。幼虫が大きくなると集団がいくつにも分かれ、被害が樹全体に及び、物理的な除去は体毛等が人へ付着し危険。ツバキ及びサザンカには微生物農薬であるBT剤の適用があり、その他の農薬も適用がある。使用する場合は、できるだけ飛散しないよう注意を要する。



成虫：開張♂ 24 ～ 26mm
♀ 27 ～ 35mm



卵塊：葉裏に卵塊で産卵された後に、雌は腹部の毛で覆う。



幼虫：集団で加害をする。中齢幼虫以降分散する。

★ドクガ

分 布 : 北海道、本州、四国、九州

発生時期等 : 年1回発生し、成虫は6～7月ころ出現して葉裏に卵塊を生みつけ、間もなく幼虫が孵化。幼虫の発育は遅く、集団で生活し、脱皮を繰り返して11月頃までに 10齢内外の中齢幼虫になって、落ち葉の下などで集団で越冬。翌春の新芽のころに活動を再開し、集団で葉を摂食して、さらに13～17齢のになって老熟してから集団生活を解消してばらばらで生活するようになる。被害はこの5～6月ころにもっとも問題となる。

寄生植物 : サクラ、バラ、キイチゴ等のバラ科、コナラ、カキなど幅広く加害する。

人への害等 : チャドクガと同様。

防除方法 : チャドクガに準ずるが、年1回発生であること、幼虫で越冬することから幼虫の発生時期が違うことに注意を要する。



成虫 : 開張♂ 25 ~ 33mm
♀ 37 ~ 42mm



成熟幼虫 : 体長約 40mm

★イラガ

分 布 : 全国

発生時期等 : 通常年1回の発生だが2回発生することもある。幼虫は7～8月から10月ころにわたって見られる。よく木の幹や枝に暗白色に褐色の縞模様のあるマユが見られ、この状態で越冬する。

寄生植物 : カキ・サクラ・ウメ・アンズ・ケヤキ・カエデ類・ヤナギ類・クリ・クルミ・ザクロ等
広い範囲

人への害等 : 多くのトゲを持った肉質の突起があり、このトゲは中空で体内の毒腺につながっていて、刺すと同時に相手に毒液を注射し、刺されると激痛が走る。

防除方法 : ドクガのように、若齢幼虫が集団で発生する習性はない。冬期にマユを確認した場合は掻き取る。カキには微生物農薬であるBT剤の適用があり、その他の農薬も登録がある。散布する際は発生樹木に限定して散布する等飛散防止に努める。